

II 特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

京都大学の活動報告



四方 篝
(京都大学
アフリカ地域
研究資料センター
特任助教)

カメルーンから研究者招へい

日本における人と自然の関わり

今年2月25日から3月2日まで、カメルーン共和国より若手研究者4名(ヤウンデ第一大学大学院生2名、ドゥアラ大学大学院生1名、農業開発研究所研究員1名)を京都大学アフリカ地域研究資料センターに招へいしました。当センターでは、2018年から科学技術振興機構(JST)と国際協力機構(JICA)の連携と支援によるSATREPSプログラムのもと、中部アフリカのカメルーンにおいて「在来知と生態学的手法の統合による革新的な森林資源マネジメントの共創」プロジェクト(通称「コメカ・プロジェクト」)を実施しています。参加者の4名は、本プロジェクトに参加し、カメルーン東部州の熱帯雨林地域における野生動物の利用と保全、非木材林産物の有効活用等をテーマとした研究・活動に取り組んでいます。

日本滞在中は、人びとの暮らしと自然の関わりが多様なあり方について学際的な視点から学び、今後の熱帯生物資源の利用と保全を展望することを目的としてプログラムを実施しました。

一行は2月25日夜、関西国際空港に到着し、翌朝、京都大学のある京都市へ移動しました。長時間のフライトに加え8時間の時差もあり、相当疲れているのではないかと心配しましたが、京都への移動後、休むことなく京都大学の研究室訪問やオリエンテーションをこなし、雪の降るなかメインキャンパスの時計台にも足を運びました。

三日目は、滋賀県立琵琶湖博物館を訪問・見学しました。博物館ではまず、琵琶湖とその周辺地域における人びとの暮らしや琵琶湖博物館の研究・活動についてレクチャーを受けました。展示室では、琵琶湖周辺におけるカワウと森と人の歴史的関係について解説し

プログラムスケジュール	1日目	関西国際空港到着
	2日目	京都大学でオリエンテーション・研究室訪問 京都大学メインキャンパス・時計台訪問
	3日目	滋賀県立琵琶湖博物館を見学 琵琶湖とその周辺地域における人びとの暮らし、 琵琶湖博物館の研究・活動に関するレクチャー受講
	4日目	琵琶湖北西部・針江地域で、 伝統的な水利用文化「川端」見学ツアーに参加 京都錦市場を見学、京町家・坪庭を見学
	5日目	京都大学附属農場を見学 奈良公園・東大寺を訪問
	6日目	京都大学総合博物館を見学 さくらサイエンス/コメカ・プロジェクトジョイントセミナー
	7日目	関西国際空港より帰国

ていただきました。カワウの個体数が増加している状況は、カメルーンの森林地域で野生動物の減少が問題視されている状況とは対照的で、参加者は熱心に質問をしていました。また、針江地域について情報提供もしていただきました。

JR琵琶湖線と湖西線を乗り継いで移動した琵琶湖北西部の針江地域では、琵琶湖の幸を取り入れた和食など、日本文化を体験する機会となりました。

四日目は、針江の伝統的な水利用文化「川端(かばた)」を見学するツアーに参加しました。解説は英語で行われ、現在も川端を利用されているご家庭を巡りながら、地中から水が湧き出る地理的背景、湧き水を水槽の高低差を利用して用途に応じて使い分ける川端のしくみ、各家庭の川端から流れ出る水の水質を保つうえでの人びとの意識や集落全体での活動にいたるまで、地域が維持してきた川端の実践と琵琶湖の関わりについて詳しくご説明いただきました。

針江から京都に戻った後は、京の台所と呼ばれる錦市場を訪問したほか、国の登録有形文化財に指定されている「懐石近又」の建物を見学する機会を得ました。伝統的な町家作りの構造と京都の四季の関係、京都の景観を模倣した坪庭のつくりについての解説をしていただき、四季折々の自然を生活のな



京都の伝統的町家を見学



滋賀県立琵琶湖博物館



京都大学附属農場を視察



針江で「川端」を巡るツアー

コメカ・プロジェクトは本年7月に終了しましたが、参加者の一部は、今年度より新たに始まった「Fastlovesプロジェクト」地域知と科学との対話による公正で持続的な狩猟マネジメント(総合地球環境学研究所・環境文化創生プログラム)の活動に着手しており、今後の共同研究の進展が期待されます。

参加者の帰国後に、コメカ・プロジェクトの日本側研究者がカメルーンを訪問した際には、日本滞在中のエピソードで盛り上がったそうです。同席していた年配のカメルーン人研究者に日本での研修をうらやましがられて、参加した学生たちは照れながらもうれしそうにしていたとのこと。さくらサイエンスプログラムの実施は、今後の連携強化のよききっかけとなりました。

かに取り入れて楽しんで、京都ならではの文化について学びました。

五日目は、京都と奈良の県境、木津川市にある京都大学附属農場を訪問し、野菜・果樹・イネなどの栽培技術や品質管理について理解を深めました。市場のニーズにあわせてイチゴやトマトの成熟期をコントロールする技術は、参加者は興味津々でした。農場の訪問後は、奈良公園や東大寺を訪問し、日本における信仰と自然の関わりに触れました。

六日目、七日目は、京都大学総合博物館を訪問し、京都大学における熱帯生物資源に関する研究成果について知見を広げました。午後は、「さくらサイエンスプログラム」と「コメカ・プロジェクト」とのジョイント・セミナーを開催し、参加者4名は自身の研究について発表しました。コメカ・プロジェクトのメンバール、ゲストスピーカーのパパ・サリオウ・サルさん(国際農林水産業研究センター主任研究員)、コメンテーターの大石高典さん(東京外国語大学准教授)、戸田美佳子さん(上智大学准教授、コメカ・プロジェクト)

参加者4名が来日したのは2月末で、サクラの花を見ることは叶いませんでしたが、植物生態学が専門の学生は、サクラの生態やサクラを愛でる日本の文化に興味津々で、帰国後も数日おきにサクラの開花状況を報告する事になりました。早咲きのカワヅザクラに始まり、シダレザクラ、ソメイヨシノ、ヤエザクラ等、さまざまなサクラの写真を送るたびにその美しさ感激し、満開の写真を送ったときには「この満開のサクラの下に寝転がって眺めてみたい!」というメッセージが届いていました。

参加者の帰国後に、コメカ・プロジェクトの日本側研究者がカメルーンを訪問した際には、日本滞在中のエピソードで盛り上がったそうです。同席していた年配のカメルーン人研究者に日本での研修をうらやましがられて、参加した学生たちは照れながらもうれしそうにしていたとのこと。さくらサイエンスプログラムの実施は、今後の連携強化のよききっかけとなりました。

参加者4名が来日したのは2月末で、サクラの花を見ることは叶いませんでしたが、植物生態学が専門の学生は、サクラの生態やサクラを愛でる日本の文化に興味津々で、帰国後も数日おきにサクラの開花状況を報告する事になりました。早咲きのカワヅザクラに始まり、シダレザクラ、ソメイヨシノ、ヤエザクラ等、さまざまなサクラの写真を送るたびにその美しさ感激し、満開の写真を送ったときには「この満開のサクラの下に寝転がって眺めてみたい!」というメッセージが届いていました。

●今後の展望

七日間という短い滞在期間でしたが、京都・滋賀・奈良での経験を通じて、参加者はさまざまな人と自然の関わりを知る機会になったと思います。また、コメカ・プロジェクトにおける日本側とカメルーン側のメンバー間での交流を、より深化させることもできました。